

生き生きシニア



突然の事故や終末期のがん、老衰などで意識を失い、回復の見込みがない場合、最期の医療に対する自らの希望をどう医師に伝えたいのか。そんなときに備え、あらかじめ自身が望む治療方針を書き記す「事前指定書」という文書があるのを知っているだろうか。万が一のときは事前指定書に示された本人の意思に沿い、医師と代理人が今後の治療を相談する。事前指定書を広める取り組みを進める稲次整形外科病院（藍住町笠木）を訪ねた。

（萬木竜一郎）

「もし、あなたの意識がなくなったとき、延命治療に対する考えを医師に代弁してくれる人はいませんか。病院に併設された老人保健施設の一室で病院・地域連携室の高橋直之主任（45）が、参加者6人に語り掛けた。

施設で開かれていたのは地域住民が事前指定書の書き方を学んだり、終活について語り合ったりする「楽カフェ」。看護師や医療相談員らが中心になり、2月から2回のペースで開く。高橋主任は「最期の医療について日頃から家族らと十分に話し、自分が望む医療を考えてほしい」と続けた。

病院が作成する事前指定書は、本人が回復不可能な状態となり意識もなくなった際の医療行為を、項目ごとに「してほしい」「してほしくない」と、チェックする方式。例えば▽心肺停止時に「心臓マッサージ」や「心肺補助装置」を望む▽食事が取れなくなった際に「胃ろう」（腹部に穴を開けて胃に直接栄養剤を注入する）の処置をするか―など11項目で選択する。

これらの医療行為は、回復の見込みがあれば、もちろん選択の余地はない。しかし、90歳を超えるほど高齢だったり、治療の施しようのない末期がんだったりした場合はどうだろうか。

最期の医療 希望記す

元気なうちに意思表示

もし、あなた自身が当事者となり、意識もなくなった場合、家族は「このまま安らかに死なせるか」「どんな形でも、できるだけ長く生きていてもらいたいか」という重い決断を迫られることになる。事前指定書は、いざというときの家族の選択を助ける道しるべにもなるだろう。



事前指定書の書き方などについて話し合う楽カフェ―藍住町笠木の高齢者施設

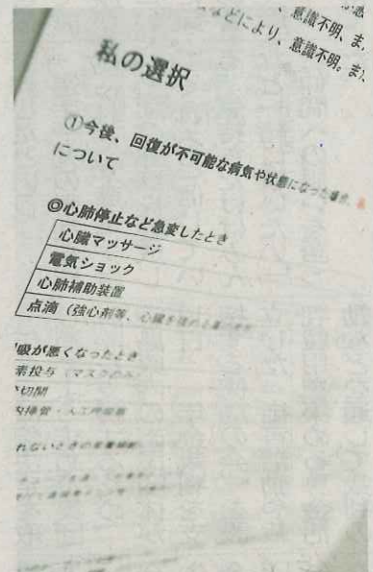
事前指定書の記載を希望する人には病院の医師や看護師、医療相談員らが事前に十分な説明を行う。本人の気持ちが変わった場合は、いつでも内容を変更することができ

島市丈六町栗田、主婦楠本美代子さん（65）は「事前指定書の内容について詳しい話を聞き、私も作っておきたいと思った。自らの意思で事前に最期の治療方針を決めておくと、家族も気持ち楽になる」と話した。

事前指定書は、それぞれの病院が独自に作成しているケースが少なくない。板野郡内では医療関係者らが一体となり、記入者がより書きやすい事前指定書の書式を検討する試みがスタートした。

郡内の医療機関などでつくる東徳島地域医療連携協議会や郡医師会は4月、「板野郡における終末期医療を含む医療の意思決定支援体制づくり検討会」を発足。国立病院機構・東徳島医療センター（板野町）で開いた初合会には、行政や医療機関、高齢者施設などの担当者約40人が出席し、秋までに統一書式の原案を作ることを申し合わせた。

「事前指定書は、最期の医療を自らが考えるきっかけになる」という同センターの長瀬教夫院長。「書式を統一的なものすれば、施設や病院が変わったとしても、そのたびに書き直す必要がなくなる。こういったものがスタンダードとしてふさわしいのか、十分に検討を進めたい」と話した。



稲次整形外科病院が作成した事前指定書

もし、あなた自身が当事者となり、意識もなくなった場合、家族は「このまま安らかに死なせるか」「どんな形でも、できるだけ長く生きていてもらいたいか」という重い決断を迫られることになる。事前指定書は、いざというときの家族の選択を助ける道しるべにもなるだろう。

三寿会 久保 邦明さん (64) 東みよし町西庄 農業

はっらっ通信

南井上井戸福寿クラブ 木津 晴子さん (79) 徳島市国府町井戸 主婦



60歳を過ぎて仕事も一段落し、ボランティアで何かしたいと思っていたところ、町の地域福祉活動計画の策定作業に携わる機会があり、地域の現状や課題を知りました。計画の内容を実践したいと考え、一緒に作業に取り組んだ地元の老人クラブ・三寿会武田力子会長に声をかけたところ、「そうじゃな、やらなにかんない」と協力してくれることになりました。

最初に立てた目標は「あいさつとボランティアを通して地域を知ること、地域の人に知ってもらうこと」。交流の場を増やすために、三寿会に加入。先輩方の持つ知識や経験の重要性を感じることも、自分もまだまだやれる―という気持ちになりました。

生きがい 歳になって やスポーツ 通じて仲間 老人クラブ 寄稿しても

1996年に仕事を退職すると同時に、地域の女性会や老人クラブに入りました。健康的な生活を送ろうと考え、クラブや近所の友達と公会堂に集まったりは趣味の手芸を教えたり、教えられたり。手芸と一言でいってもさまざまな種類があり、日々挑戦を続けています。

例えば、押し花は週に1回、仲間10人余りと10年間続けました。端切れを使った押し絵では、えとを制作。額に入れて自宅に飾ると、気持ちも豊かになりました。老人クラブが開く誕生会や独居高齢者が集まる食事会のたびに、作った小物を皆さんに差し上げると、とても喜んでくれます。

自宅で友達と一緒に楽しむ手

事前指定書の普及に熱心に取り組む稲次整形外科病院。病院を運営する医療法人凌雲会の稲次正敬理事長に、事前指定書を書く意義や注意点などを聞いた。

医療法人凌雲会 稲次理事長インタビュー

事前指定書を書く意義や目的は、本人が安らかな死を迎えたいと思っても、最期の医療を医者任せにしていると、そうならない場合もある。いざというときのことを親族や医療者と話し合い、元気が落ちから準備を進めていくことが大切。事前指定書はそのためのものだ。

「家族にとってはどんな意味があるのか。意識がなくなったり、認知

症で正常な判断できなくなったりしたときでも本人の思いが家族に伝わり、最期の医療に関する判断をしやすくなる。遠方に住み、日常的にあまり接する機会がない親族も文書として残していれば、本人の意思を受け入れやすいだろう。

「事前指定書を書く上での注意点は、死をタブー視するのではなく、普段から向き合うことが重要。それだけに、事前指定

「事前指定書を書く上で大事なことはプロセス」と話す稲次理事長。藍住町笠木の稲次整形外科病院

書を書く上で大事なことはプロセスだ。急いで書き上げる必要はなく、医師から医療行為の内容を詳しく教わったり、

